

野外

いざ〈霧の海〉へ。どの選択
肢よりも、壮大かつ冒険心溢れる旅となる
だろう。未知なる世界へ旅立とうというの
だから、いつまでも生まれた大陸の周りをうろつ
いていてもしょうがないだろう？

翌朝、新たなる決意を胸に、波止場へと向かった。東に向かう船は2隻。

1隻は〈首都〉からの衣服や宝石や装身具を積んだ大きく頑丈な交易船だ。優雅なヴァルラスの船長は、船員として乗船する約束で確かな賃金を保証してくれた。

もう1隻は煙をもくもく上げる機械仕掛けの小型蒸気船だ。イカれたクワトリルの女船長は「アタシの邪魔をしない限りは乗せてやってもいいさ。ただこの船が運んでるブツに関しては、わかってるだろ？ くれぐれも他言無用だよ、このクソったれどもが」と言い放った。

選択 A：商船の船員として加わる。時間はかかるが安全確実に金になる。

選択 B：クワトリルの船に乗る。これこそが「冒険心に溢れる」選択だ。

野外

激しい揺れと傾きのせいで、立っているのも難しい。船は徐々に崩壊していく。諸君のうちひとりドレイルを探して下層を泳ぎ、残りは甲板の救命ポートを目指した。パーティはといえば、棺となった船室にとり残された。

なんとか両方とも見つけ出したが、ドレイルはうつ伏せで水面に浮かんでおり、酷い火傷を負った上に息もしていない。いったん漂流物の上に引き上げ、小型の救命ポートにまで運びこんだ。

ひとりは胸部圧迫や人工呼吸を繰り返したが、ドレイルの運命に興味がない他の者は、沈みゆく船から機械類を回収しようと水中に飛び込んだ。

何とかドレイルは息を吹き返し、肺まで呑みこんだ水を弱々しく吐き出した。仲間がいくつかの装置を手に戻ってきたところで、水平線上の島を目指すことになった。第一印象よりは大きな島だった。辿り着いたのは危険な絶壁だが、切り立った崖に洞窟の入口が見えた。

選択 A: ドレイルの看病のためにも、安全な上陸地点を求めて周囲を探し続ける。

選択 B: 危険な洞窟！ そら冒険だ！ ドレイルの容態なんて知るものか。

野外

「アタシなら、この砂浜にいるから心配ないサ」と言うドレイルを後に残し、支度を終え、鬱蒼とした森に分け入って島の奥へと向かった。

今回は誰かの命が危険にさらされているわけでもないため、より注意深く歩みを進める。前方に何ら危険がないことを確認しつつ、ゆっくり藪を抜けた。あの奇妙な旋律は、さらに大きくなっていく。

一時間後、目の前に広場が現れた。森の中にも関わらず、大きな石の構造物がある。ところがいきなり、諸君の注意は右側の動きへと惹きつけられた。奇妙な縞模様で鮮やかに着飾った小柄なヴァームリングの斥候が、森の奥へと逃げていく。他の連中に、こちらの存在を告げに行ったに違いない。

選択 A：ヴァームリングを無視して石の構造物を目指す。

選択 B：ヴァームリングを捕らえ、自分たちの存在を悟られないようにする。

野外

諸君は、窪骨族が祝祭を終え、飛行能力を得るのを目撃した。アントグートは空中から幸せそうにさえずり、感謝の意を示した。諸君はその奇妙な肉を鞆一杯に詰め込み、再び島の奥の石造構造物を目指して歩き始める。

引き返し、何とか来た道まで戻ると、あの絶え間なく続く旋律が聞こえて来て、神殿を見渡せる広場までたどり着くことができた。聳え立つ威容で、巨大なピラミッド型の土台に、多層の尖塔が乗っている。どうやって建てられたのか皆目見当もつかない。とはいえ、ヴァームリングが建てたとも思えない。太古の不吉な何かが感じとれる。旋律は辺りを満たしていたが、どこから聞こえてくるかは分からない。

多層尖塔の上層に、何やら動く影を認めた。広場を進み、注意深く近づく。土台まで到達すると、石の表面に、上へと続く階段が刻み込まれていた。また華美に装飾されたピラミッドへの入口があり、こちらには地下へと下りる階段がある。

選択 A：尖塔に向かって階段を上る。

選択 B：ピラミッドの暗がりへと潜って行く。

野外

飛行という壮大な体験をした
諸君は、覚悟を決めて荒廃した島を後に、
風に乗って更に高く舞い、外洋を東へ東へと進
んだ。

期待どおり素晴らしく興奮する旅だった。だ
がそれも羽毛が抜け始め、だだっ広い海に急降
下するまでのこと。

最悪な着水だったが、海面を漂う時間が長く
なると、さらに酷さは増してくる。太陽は傾き、
水平線上には暗雲があった。自暴自棄になりか
けたころ、幸運なことに、よれよれの帆のポー
トが近づいてきた。最後の力をふりしぼり、声
を張り上げて腕を振った。しばしの後、何とか
そのポートに引き上げられた。一時しのぎの救
命ポートに過ぎず、甲板はぐらついていた。だ
がそこで目にしたのは、まぎれもない片耳パー
ティその人であった。

選択 A： 剣を向ける。ドレイルの復讐は果たさな
ければならない。

選択 B： 一時休戦する。その知識なしで嵐を乗
り越えれそうにはない。

野外

ドレイルとパーティの両方を
昼夜見張り続けるのに、途方もない労力
を強いられた。それでも最初の数日は何とかや
り遂げたはずだが……。

東へ航海を続けて5日目の午後。船室で黙って
皆で食事をしていると、いきなりドレイルがせき
込み、嘔吐した。どんどん悪化し、とうとう血染
めの床にひざまずいた。何とか助けたかったが、
何もできなかった。断末魔の吐血と共に、床に崩
れ落ちた。

ドレイルは死んだのだ。パーティを見上げると、
満足げに傍らに佇んでいた。

「おい、そんな目で見るなよ。こいつは、あいつ
か俺かのどちらかにいつか起こり得たことさ。警
告しただろ、選べって。だがお前らはそれを拒絶
した。だからこの俺が、お前らみんなのために選
んでやった。感謝してくれていいんだぜ」

選択 A： 状況を受け容れてこのままパーティと
航海を続ける。

選択 B： 自分たちも毒殺される前にパーティを
放り出す。

野外

くたくたではあったが、力を振り絞って何とか鎖を破壊し、鉄の拘束からその身の自由を取り戻した。闘技場の壁をよじ登ると、見物客のオーキッドはみな悲鳴を上げながら逃げていく。衛兵の一団が白いロープのオーキッドの周りを固め、安全な場所へと誘導していく。

他にいい考えも浮かばなかったもので、民衆の逃げる方向へと急いだ。脱出に使える出口があるといいのだが。しかしいきなり行く手を阻まれた。前方の影のなかより、黒いロープの落ち着きはらったオーキッドが現れたのだ。

「君たちは期待通りだった」彼は言った。「自由が欲しいのなら一緒に来なさい」言い終わるや否や、再び影の中へと踵を返した。諸君がついてくることを確信していた。振り向いて、今まで向かっていた出口のほうを確認する。多数の武装した衛兵が、諸君の前進を阻もうと隊列を組んでいる。簡単に突破できそうにはない。

選択 A： 黒いロープのオーキッドを追って影の中に入る。

選択 B： 出口まで戦って切り抜ける。

野外

《博士》を黙らせ、廃墟と
なった城の地下道を急いで駆け抜ける。
計画どおり進めれば、気づかれずに済むはず
だ。いくつもの秘密の壁を通り抜け、隠し階段を
駆け上がり、アッシュトウースが特定した《神託
者》の聖域に着いた。

内陣にまで進み、護衛に囲まれた白いローブ
のオーキッドと対峙した。

「自由を勝ち取るために戦うのかや？」《神託
者》が言った。「わらわを追い詰めるとは見事よ
の。これほど早く、ここまでたどり着こうとは。
しかるに、それもこちらの手の内。では提案しよ
うかの。わらわを故国まで導くのじゃ。汝らを助
ける者どもがおる。汝らを買った密輸入の居場所
も教えよう。じゃが万が一にも目の前の、破滅的
な道に足を踏み入れるというなら、愛しきパー
ティは、汝らの手の届かぬ所へ消え失せよう」

選択 A：《神託者》を攻撃する。

選択 B：《神託者》の交渉に応じる

野外

念願の自由を取り戻した今、どこまでだって進んでいける。だが大海原に漕ぎ出した諸君が選んだのは……西のグルームヘイヴンへ取って返すことだった。パーティの船で過ごした時間は無駄にはならなかった。おかげで帆走と航法の知識を身につけることができた諸君の航海は、順調に進んでいった。

最初の波乱に満ちた旅路と比べると、帰路は実に単調で飽き飽きしてきた。来る日も来る日も、ただただ目の前に広がるのは広大かつ終わりのない水面。

そんなある日……見覚えがあるものが見えてきた。かつて後にした、引き裂かれて廃墟となった、あの島だ。船を近づけ、なかば水没した岩々に沿って周囲を回っていると、垂直な崖に、以前見た洞窟を発見した。その洞窟わきに、諸君のものとよく似た様式のオーキッド船が停泊している。

選択 A：洞窟を調査する。

選択 B：余計なことはせずにグルームヘイヴンを目指す。